

[住まいづくりの目的] 心地よく環境にやさしい生活を支える

## 夏の快適、涼やかな生活に寄与する

### 自然の風を取込み涼感を得る

☞ 掃出し窓 高窓・天窓 地窓 越屋根  
格子 続き間 吹抜け  
襖 引戸 欄間 坪庭・中庭

蒸し暑いモンスーン気候のわが国では、「夏を旨にすべし」と言われてきたように、住まいに自然の風を取り入れて涼感を得ることが、古来より重視されてきました。

風を取り入れるためには、風の流入口と流出口となる開口部を壁に設けることが必要です。夏や春・秋における敷地の風特性を読み取り、卓越風が当たる壁面に「掃き出し窓」などの大きな開口部や、全開放できる開口部を設けることが効果的です。室内に滞留する空気は温められて上昇しますので、開放できる「高窓」を設けてそこから排出するとともに、室内の低い位置に「地窓」を設けて外部空気を取り入れ、室内空気の循環を促進することも有効です。

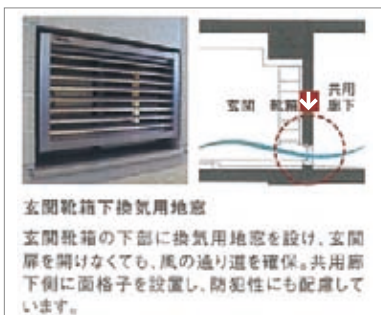
開口部の防犯性やプライバシーを高めるためには、大きさを工夫したり、「格子」などを付属させることで対応できます。

室内の通風性や空気循環性を高めるために、平面的には「続き間」を、断面的には「吹抜け」を設けて、連続性・一体性の高い間取りにするとともに、部屋と部屋の間を「引戸」や「欄間」で、開放しやすくしておくことも大切と言えます。

狭小な敷地の場合、「坪庭」や「中庭」を設け、日中日陰となる庭を通じて、温度の上がらない外気を室内に取り入れて、涼感を得る方法もあります。



吹抜けと1階、2階に大きな窓を設置。外部風を取り込み、住宅内での空気の動きをうながす



集合住宅の住戸の玄関取納下の地窓。プライバシー、防犯性に配慮して通風を確保 (写真：③)



地窓と一般窓を組合せ、地窓には格子を設置。通風、プライバシーの確保とともに防犯や転落防止にも配慮 (写真：⑦)



リビングに面する引込み形式の全開放できる掃き出し窓。対面にも窓を設けて室内の風通しをよくする (写真：①)

## 四季の変化を感じ、楽しむ

日本の四季の変化は、私たちの日常生活に潤いや豊かさをもたらしてくれます。かつての日本の住まいでは、戸外の植栽や木々などが季節とともに変わっていく様を、室内からも感じ、楽しむことが、大切にされてきました。

庭の各所には花木など「植栽」がきめ細かく施され、「前庭」には季節感を感じるシンボルツリーなどが植えられ、訪れる人を迎えました。

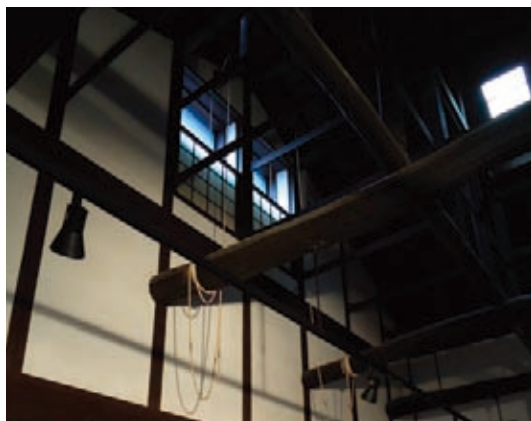
戸外と室内の間の境界には、庭の配置や植栽を考慮して「掃き出し窓」「地窓」などが適所に設けられ、戸外の自然の景観が、室内にいながら様々な場において望まれました。

また、敷地条件に応じ、「坪庭・中庭」を計画して室内と一体性の高い戸外空間をつくり、室内環境を少しでも心地よいものにする工夫が講じられてきました。



庭の緑への眺めを意図した大きな嵌め殺し開口(写真:⑤)

伝統的な民家の通りニワ上部に設けられた高窓。やわらかい光が採り入れられる



キッチン・ダイニングに面する大きな掃き出し開口を通して、庭の緑と季節感を日々感じられる(写真:①)

リビングの掃き出し窓に紙障子を設けて、日射をやわらかい光に調整する(写真:①)



## 光を採り入れる、制御する

かつての住まいには、腰壁のある窓以外に、掃き出し窓、欄間窓、高窓など様々な種類の窓が設けられていました。いずれも採光に効果がありますが、とくに町屋などに設けられていた「高窓」は、室の奥まで光を導き、光の均一性を高める効果があります。

地面で反射した光を軒裏でさらに反射させて光を導くこと、白漆喰などの反射率の高い室内仕上げとすることも、室の奥まで光を導き入れ、明るさを高める効果があります。

これらは室内の明るさの確保に寄与しますが、単に明るさを確保するだけでなく、陰影が生活に情趣をもたらすこともあります。「障子」「すだれ」などを窓に組み合わせることで、採り入れる光の量や質を調整し、少し暗くしたり柔かい光にすることもできます。また、プライバシーの確保にも役立てることができま

[住まいづくりの目的] 日々の暮らしを楽しむ

## 自然の変化やその風合いを感じとる

### 自然の素材を味わい、継承する

◎ 瓦屋根 土壁 漆喰壁 板壁  
襖 引戸 障子 畳(和室)  
板の間 自然素材・地域産材

かつての日本の住まいは、木、紙、土、石、竹などの自然の材料を基本としてつくられていました。それらの多くは地域で採取され、地場の職人により生産・加工され、経年時に修繕が施され、使い続けられてきました。

自然の材料は豊かな素材感や風合いを備えています。また、加工・製作にも工夫が施され、美しい造形が多くあります。それらが身近にあることは、人の感性の繊細さや感受性、愛着を育む効果があると言えるでしょう。

また、自然の材料は手入れに特殊な技術を必要としないものが多く、その方法は先代から伝えられて住み手自らが手入れを担っていました。それゆえに、住み手が住まいに

対し愛着を持ち大事にしてきたという面もあるでしょう。

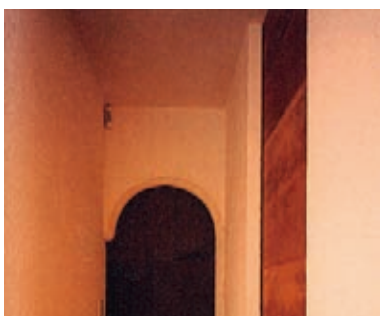
現代の住まいにおいても、「瓦屋根」、「土壁」、「漆喰壁」、「板壁」「襖・引戸」「障子」などの木製建具、「畳」「板の間」といった自然の材料やそれを用いてつくられる建材を取り入れることは、特別なことではありません。とくに自然素材への関心は最近高まっています。自然の材料を用いることは、コストに多少の配慮が必要になることがありますが、暮らしの豊かさだけでなく長寿命で愛着のある住宅づくりやそのための地場の技術の保全にも奏功すると言えるでしょう。



障子の組子と和紙のテクスチャー、プロポーションを味わう



瓦屋根、漆喰壁の素材の質感、対比を楽しむ



和紙を用いた壁装の柔らかみのある素材感を味わう (写真：①)



畳、襖、障子、漆喰塗り、木の柱・差し鴨居の自然の素材で構成した和室。清潔で洗練された印象 (写真：①)



外壁下見板張りの質感を味わう。経年により愛着が育まれる (写真：①)

## 趣味を実践し楽しむ

近年の余暇時間の拡大、所得の増加、情報化などとともに、住まいの中でも趣味を実践するライフスタイルが重視されています。読書、絵画、茶道、生花、料理、音楽、健康増進、DIY、ペット、園芸など、住宅のなかで実践される趣味には様々なものがあります。

趣味を十分に行うには、各趣味に応じて、汚れにくさ、吸音性や遮音性、座れる床、戸外とのつながりなどを備えたスペースが必要になります。けれども、例えば茶室のように、使い方が特定の趣味に限定される部屋を用意できるケースは少ないのが実情です。そのため先人の試みを活かして、「和室」「土間」といった普段は家族共用の場でありながら、必要時に別の目的に利用できる融通性・転用性の高いしつらえのスペースを確保することが現実的と言えるでしょう。これらのスペースと隣室や庭とのつながり・動線などに留意して、複数の用途に使いやすい場を創出する工夫が大切となるでしょう。



床面に堅牢な材料を用いた土間は、戸外の趣味生活にも対応しやすい(写真:①)

リビングに連続する和室に仏壇を設置。床の間のとりに納められている(写真:①)

## 思い出を受け入れ、心を落ち着かせる

かつての日本の多くの住まいには、「仏壇」「神棚」といった礼拝の場が設けられていました。これらは単に信仰や宗教上の用具ということだけでなく、昔は訪問客がまず仏壇に挨拶する習慣があったように、普段の生活のなかで礼節を知り学ぶ場としての意味もありました。

現代の生活習慣は昔とは著しく変わりましたが、現代でも、礼節を重んじる機会、祖先のことを思い敬う機会などは、自己の心情を顧み、気持ちが落ち着くとともに家族のつながりを再確認できる面もあるでしょう。

洋風化し、広さの限られた住まいにおいて、「仏壇」「神棚」のスペースを確保し、それを現代の意匠や家具などと調和させるのは難しい面もあります。しかし、例えば、マンションでも飾り付けのコーナーと一体にする、建具などで仕切れるようにする、将来のスペースを用意しておく(当面収納に用いる)などの工夫により、そうした場を形成し、継承していく方法があると考えられます。



畳縁のない半畳を敷き込んだ和室。ニュートラルな雰囲気、様々な使い方に対応させやすい(写真:①)

押入の上部スペースに神棚を設置。床の間とともに飾りの要素となっている(写真:①)



[住まいづくりの目的] 日々の暮らしを楽しむ

## 暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう

### 和の意匠を味わう

☞ 瓦屋根 漆喰壁 板壁 畳(和室)  
真壁 格子 障子 襖 引戸  
大黒柱 自然素材・地域産材

日本の住まいは、懐かしさ、落ち着き、愛着などを感じることのできる自然の材料が各所に用いられ、その素材を活かした意匠が施されていました。そうした素材や意匠は視覚的な豊かさを与えてくれるだけでなく、機能上も意味があり、継承されて使われてきました。

「瓦屋根」「漆喰壁」「板壁」は日本の住まいの代表的な外装材で、落ち着いた深みのある印象を与えるとともに、日本の多雨・高湿な気候風土に対して建物を保護する機能をもっています。

室内は「和室」で、柱を表に見せ壁に漆喰塗りなどを施す「真壁」を基本とし、建具や床材・天井材には木や竹、

い草・わらなどの「自然素材」が多く用いられ、柔らかくて優しい質感を感じられるとともに、調湿などの効果もあると考えられています。これらの素材は耐久性が高いことに加え、入手し易く補修も比較的容易です。

現代の住まいでは、伝統的な素材や意匠のみで構成するのではなく、新しい建材や工法を組み合わせることが考えられます。椅子座の生活や大壁のしつらえと、自然素材やきめ細かさに配慮された和の意匠を工夫して、バランスよく組み合わせることにより、現代のライフスタイルにもよく合い、材料や建材の生産・流通状況にも対応した、新しい洗練された意匠を創出することができるでしょう。



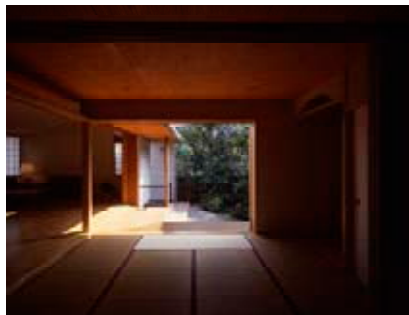
畳、雪見障子、襖、土壁(聚楽壁)。小さなスペースでも和の意匠が活かされ、居心地がよい(写真:①)



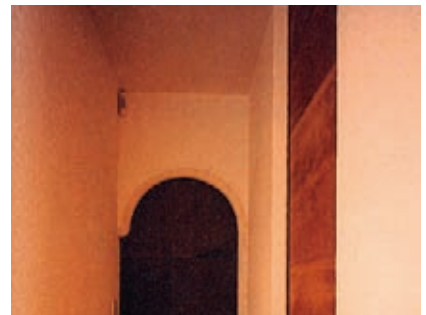
太い象徴的な柱を据えて畳の間を2方に開放。材のプロポーションに配慮され、板の間とも調和し、空間のメリハリを感じさせる(写真:①)



漆喰壁、瓦屋根の伝統的な住宅。落ち着きを感じさせる



和室と連続する庭。プロポーションの美しさと陰影による深みを感じさせる(写真:⑤)



かとうぐち(火灯口)と和紙を用いた壁装。温かさ、柔らかさを感じさせる(写真:①)

## 家族の気配や様子を感ずる

襖 引戸 障子  
続き間 吹抜け 畳(和室)

かつての日本の住まいでは、内部に横引式の「襖」「引戸」「障子」などの建具が使われてきました。洋風化・個室化が進んで和室が減少したことに伴い、現代の住まいでは回転式のドアを用いることが一般的になっています。

横引式の建具は、回転式のドアに比べて開放時に通行の邪魔にならず、開放寸法を自由に調整できます。隣の部屋の様子を視覚的に遮りたいときには閉鎖したり開放寸法を小さくし、生活の様子を窺い知りたいときには開放寸法を大きくするなど、使い分けることができます。こうした家族同士が日常的にお互いのことを気に留める暮らしを重ねて、他者との関係を配慮する気持ちが育まれることにつながるかもしれません。

今日、引戸や障子のデザインは工夫されたものが見られ、洋室に使用してもとくに不釣り合いになることはありません。とくに障子を用い、木の棧と紙が織りなす意匠の美しさにより、室内の雰囲気をも柔かく洗練したものにする事例も多く見られます。

最近では、個室よりも家族の共用スペースを重視した、連続性・一体性の高い間取りも見られるようになってきました。家族が時間や空間を共有して、一緒に過ごすことを大切にすライフスタイルの現れと言えるでしょう。襖、引戸などの柔らかい間仕切りを上手く使い、そうしたライフスタイルに相応しい場をつくることもできるでしょう。



キッチンから見渡したリビング。奥の土間と格子の引戸で仕切り、利用に応じて開閉（写真：①）



ダイニングと連続する畳の間、開放的なつくりで食事や寛ぎの様子が住宅全体に広がる（写真：①）



吹抜けを介して、1階と2階にいる家族が、お互いの様子をうかがい、声掛けする（写真：①）



キッチンで食事の支度をしながら、デッキや室内で遊ぶ子どもの様子が見られて安心（写真：①）

[住まいづくりの目的] 人と人との関係を守り育てる

## 家族が見守り合い、成長する

### 家族の集いをうながす

☞ 畳(和室) 板の間  
土間 囲炉裏

家族が住まいの中で集い過ごす方法は、家族の構成や年齢によって様々です。かつての日本の住まいにみられた「畳」「板の間」「土間」「囲炉裏」などは、現代にも取り入れることができ、家族の集いをいざなうでしょう。

「畳」は弾力性や保温性を備え、空気の調湿作用をもっています。畳の間は、乳幼児を安心して休ませることができ、年齢を問わずリラックスできて寛げる場にもなり、また、ダイニングやキッチンに近い場所に設けると、家族が集うスペースの中心ともなります。

「板の間」は木の柔らかな触感や温かみを感じられ、椅子座だけでなく床座の生活にも利用できます。小さな子どもの遊びにも適しますので、子どもを中心にした家族の集

いをうながします。

「土間」は趣味を楽しめる以外に、戸外に面する開放的で気持ちのよいしつらえにして、第二のダイニングや子どもの遊びに利用することも考えられます。

「囲炉裏」は採暖や調理に使われ、かつては家族がその周りを囲んで団らんする生活が行われていました。今日、囲炉裏が設けられることは少なくなりましたが、火のある場を住まいの中心とする考え方は大切にされ、薪ストーブなどの普及が進み、集いの場を演出しています。

このように空間構成にマッチした床の素材や暖房機器の採用などにより、家族が集う場に相応しい空間づくりにつながるものと考えられます。



温かみのある無垢材の板の間と畳の間。子どもの遊び、お年寄りの寛ぎなど、様々な使える (写真:①)



玄関から続く土間スペース。家族が集まり、遊びや趣味などを楽しむ (写真:①)



食卓に炉を設けている。家族が火を囲み食事を楽しむことを重視している (写真:①)



小上がりの畳の間をダイニング・キッチンの近くに配置。子どもを休ませたり、家族がつろぎやすい (写真:①)

## 集いをうながす

☞ 続き間 縁側  
土間 濡れ縁

住まいでの人と人の交流には、子育てや趣味、地域のボランティア活動などを通じて知り合った友人や仲間、学生時代から付き合いの続く友人、職場の同僚などとの交流があります。最近ではホームパーティやガーデンパーティなど、住まいの身近なところで、家族以外の人々と集う機会が増えてきました。

住まいのなかに人が集いやすい場を形成するためには、ゆとりがあり融通性の高いスペースや自然を感じられる心地よいスペースが有効です。「続き間」(広間)は間仕切りを上手く使い、大人数から小人数の集まりまで色々な目的に柔軟に対応できます。かつての日本の住まいには、この

続き間と戸外(庭)のあいだに、板敷きの「縁側」が設けられていました。「縁側」は通路以外に広間の補助的なスペースとして使えるとともに、戸外の自然環境をうまく引き込んで心地よい室内環境をつくりだします。

また、創作やアウトドアなどの趣味の活動を家族以外の人々が参加して一緒に実践できる場として、室内と戸外とのあいだに「土間」を、また、戸外に「濡れ縁」(デッキ)などを設けることも有効です。これらの境界部分の建具を全開放できるようにする、床の素材を工夫することなどにより、活動の楽しさは膨らみ、新たな展開にもつながることでしょう。



板の間と畳の間の続き間はホームパーティや趣味など多用途に利用できる(写真:①)



部屋と庭のあいだの土間スペースは、人と人との集いの中心の場となる(写真:②)



屋外のウッドデッキで、友人らとともに、自然を感じながら食事を楽しむ(写真:③)



集合住宅の共用庭にテーブルなどが置かれ、入居者同士が集まったり、家族が使える場を形成している(写真:④)



庭に面する明るい縁側状の広間で、友人家族を迎えて、子どもと大人が食事とともに楽しむ(写真:⑤)



[住まいづくりの目的] 人と人との関係を守り育てる

## 人を迎え入れ集う

### 来訪者を気持ちよく迎え入れる

☞ 植栽 前庭  
玄関 格子  
建物配置

住まいはその場所に存在している間、様々な人が訪れ、その前を往き来します。住まいを訪れる人が気持ちよさを感じたり、その前を往来する人が落ち着きや安心を感じられるよう、住まいの外観や玄関構え、門塀、垣、庭などのつくり配慮することが大切です。

通りに面する花木や生垣などの「植栽」は、道を行く人の目を楽しませてくれます。開放的で、すこしゆとりのある「前庭」は、近隣の方とおしゃべりの場ともなります。「玄関」は日本の伝統的な習慣である履き替えの場ですが、ここを明るく、ゆとりのある空間とすることで、訪れる人に心地良さを感じさせます。玄関から続くホールに「地窓」

を設けて庭の緑が望めるようにする工夫なども、自然の潤いを感じさせる効果があります。

かつての都市の住まいでは、通りに面して「格子」が設けられていましたが、これは風を通しつつ外部からの視線を制御してプライバシーを確保する工夫です。同時に直線で構成される美しく細やかな意匠は、通りから見て閉鎖的な印象を感じさせません。格子は祭りのときなどには外されて、内が外に開放される使い方もされたようです。閉じて断つ、開いて入れる機能を使い分けるその方法は、身近な他者に配慮しながら暮らす上での知恵の現れと言えるでしょう。



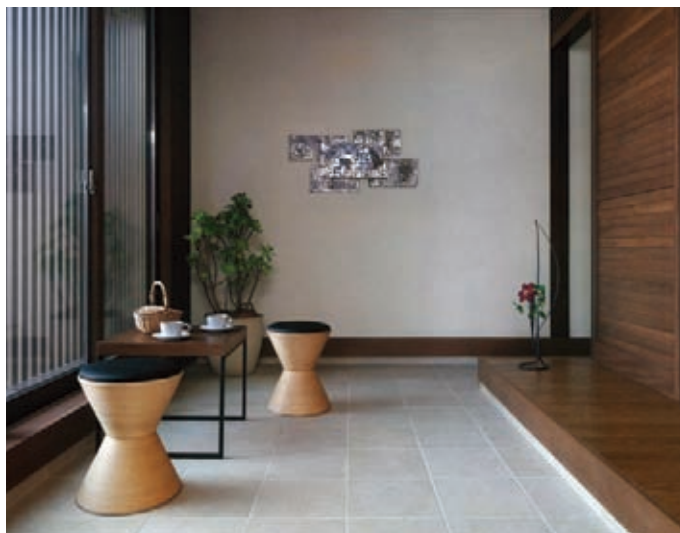
落ち着いたゆとりのある玄関ポーチ、玄関の正面は地窓を通して庭の緑を感じられる (写真：①)



京町屋の通りに面した格子は視線の制御と内外のつながりを両立、祭りのときは取り外される



通りから建物までに引きをとり、緑の庭木のあるアプローチをしつらえ、来訪者をお迎えする (写真：①)



玄関の土間部分にちょっと腰掛でき、来訪者とおしゃべりできる (写真：④)

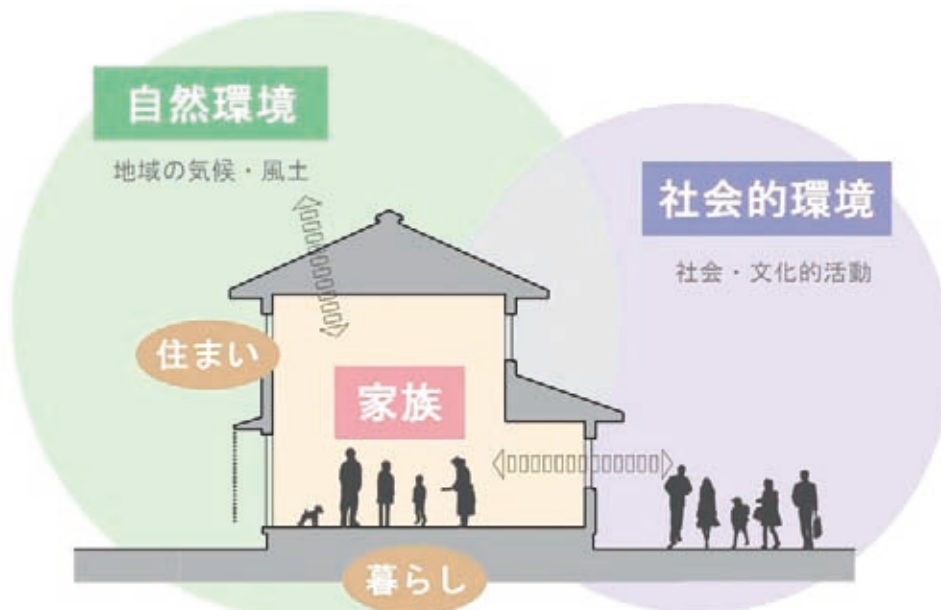
## 住まいづくりの目的チェックシート

住まいづくりの目的	効果
<p><b>人と人との関係を守り育てる</b></p> <p>人を迎え入れ集う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 来訪者を気持ちよく迎える</li> <li><input type="checkbox"/> 集いをうながす</li> </ul> <p>家族が見守り合い、成長する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 家族の集いをうながす</li> <li><input type="checkbox"/> 家族の気配や様子を感じる</li> </ul>	<p>暮らしは「社会」のなかで生まれ、人と人の中で成り立っています。住まいに交流の場を設けること、人との関わりに配慮したしつらえを施すことは、社会的な生活を育み、住生活のみならずそれをとりまく地域社会を豊かにしていくことにつながります。</p> <p>「家族」の生活や成長の器としての住まいのつくりは、家族相互の関係に少なからず影響を及ぼします。家族がお互いに心を配り、尊重し合う関係の形成に寄与するような住空間や各部のつくりが大切となります。</p>
<p><b>日々の暮らしを楽しむ</b></p> <p>暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 和の意匠を味わう</li> <li><input type="checkbox"/> 趣味を実践し楽しむ</li> <li><input type="checkbox"/> 思い出を受け入れ、心を落ち着かせる</li> </ul> <p>自然の変化やその風合いを感じとる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 自然の素材を味わい、継承する</li> <li><input type="checkbox"/> 四季の変化を感じ、楽しむ</li> <li><input type="checkbox"/> 光を採り入れる、制御する</li> </ul>	<p>住まいは食事、就寝など基本的な生活行為の場であると同時に、「社会」の中で形成されてきた文化的な様々な行為や活動を楽しめる場でもあります。そのような場を住まいのなかで形成することは、日々の暮らしに豊かさ、深み、緊張感などを与えます。</p> <p>「自然」とのふれ合いは、私たちの気持ちに落ち着きや潤いを与えてくれます。住まいのなかで、自然を感じられる空間を形成する、自然の素材を活用してその変化や風合いを楽しめることは、日々の暮らしに一層の彩りを添えてくれます。</p>
<p><b>心地よく環境にやさしい生活を支える</b></p> <p>夏の快適、涼やかな生活に寄与する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 自然の風を取り込み涼感を得る</li> <li><input type="checkbox"/> 日射を遮り室内への流入を抑える</li> </ul> <p>冬の快適、あたたかな生活に寄与する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 熱移動を調節し寒さを緩和する</li> <li><input type="checkbox"/> 日射熱を集め蓄えて暖かくする</li> </ul>	<p>夏期の高温・多湿な気候に対して、日射の遮蔽や自然風の活用による採涼は、従来から住まいに工夫して用いられてきました。夏期や中間期の「自然」を制御し活用することは、生活時の省エネルギーにも寄与します。</p> <p>冬期の低温な気候に対して、日射熱の活用や熱の調節による採暖は、夏の対策ほど意識されてこなかったものの、かつての住まいのなかで効果が得られる要素もあります。それらを工夫して用い、冬期の「自然」を制御することは、暖房エネルギー消費の削減にも寄与します。</p>
<p><b>外的環境から建物を保護する</b></p> <p>家をいためる自然の力を和らげる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 風雨から建物を守る</li> <li><input type="checkbox"/> 湿気から建物を守る</li> </ul>	<p>強い雨風、大雪、高い湿度といった「自然」の環境要素は、それが長期間にわたり過度に建物に作用すると、建物を傷める要因となるおそれがあります。各部のつくりや材料の使用法に工夫をこらし、地域の気候風土のなかで長寿命な住宅とすることが大切です。</p>

次のページから、「住まいづくりの目的」を達成するための建築的な対応方法や考え方について、事例を交えて紹介します。

## 住まいづくりの目的と対応のしかた

日本の住まいと住まい方は、古来より、地域の自然環境に呼応し、かつ、社会的環境や家族関係の変化の中で形成され、受け継がれ、発展してきました。この自然環境、社会的環境、家族関係のなかでつくられ、継承されてきた日本の住まいとそこでの暮らしを再確認することを通じて、現在における住まいづくりの参考になる考え方や設計手法などを見出すことができます。



昔も今もかわらない—住まいと暮らしをとりまく自然／社会／家族

これから住宅を取得（建設または購入）することをお考えの一般のユーザーの方は、どのような住まいにすることを望んでいるでしょうか。ユーザーの方の中には、次の住まいや暮らしのイメージがつかずに、迷っている方も多くいるのではないのでしょうか。この手引きでは、住まいづくりの目標像となるようなテーマを整理し、「住まいづくりの目的」として掲げています。自然環境、社会的環境、家族関係のなかで築かれ、使われてきた日本の住まいのありようから、現在における「住まいづくりの目的」を次のとおり4つ設定しました。

### 住まいづくりの目的

人と人との関係を守り育てる

日々の暮らしを楽しむ

心地よく環境にやさしい生活を支える

外的環境から建物を保護する

この「住まいづくりの目的」は、ユーザーの方が住まいづくりで大切にしたいことを考える際の指針になるものと考えています。右のページにそれぞれの具体的内容と効果をチェックシートに示しますので、大切にしたいと思うテーマがあるかどうかチェックしてみてください。

目次	2	住まいづくりの目的と対応のしかた
		人と人との関係を守り育てる
	4	人を迎え入れ集う
	6	家族が見守り合い、成長する
		日々の暮らしを楽しむ
	8	暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう
	10	自然の変化やその風合いを感じとる
		心地よく環境にやさしい生活を支える
	12	夏の快適、涼やかな生活に寄与する
	14	冬の快適、あたたかな生活に寄与する
		外的環境から建物を保護する
	16	家をいためる自然の力を和らげる
	18	日本の住まいの要素
	19	屋根・軒 … 勾配屋根 瓦屋根 越屋根 深い軒
	20	外壁 …… 板壁 漆喰壁
	20	開口部 …… 高窓・天窗 地窓
	21	掃き出し窓 窓庇 日除け 格子
	22	雨戸
	22	内部建具 … 襖 引戸 障子
	23	欄間
	23	内部空間 … 続き間 縁側 玄関
	24	吹抜け
	24	ゆか …… 畳(和室) 板の間 土間
	25	内部意匠 … 真壁 大黒柱
	25	装い …… 床の間 仏壇・神棚
	26	囲炉裏
	26	素材 …… 土壁 自然素材・地域産材
	26	戸外 …… 濡れ縁
	27	坪庭・中庭 植栽 前庭
	27	配置 …… 建物配置

●本編に掲載の写真・画像の出典および提供者（各写真・画像に番号を記載）

① 季刊「ナルチンびと」（風土社）

② 積水ハウス

③ 野村不動産

④ ミサワホーム

⑤ 片山和俊（設計）・木寺安彦（写真）

⑥ 阿部利広／阿部建築研究室

⑦ 古川保／古川設計室

⑧ 柴田裕弘／G A開発研究所

⑨ YKK AP

⑩ 一般社団法人日本襖振興会

記載なき写真・画像はアルセッド建築研究所が提供。本編の記事、写真、図版等の無断転載を禁じます。

## 「今に生きる日本の住まいの知恵」について

日本の住まいは、木の柱、土台、はりなどを骨組として、土を用いた壁に塗り仕上げを施し、茅・木板や樹皮・瓦などで屋根を葺く工法により、古来よりつくられてきました。地域で産出され、生産された自然の材料をふんだんに取り入れ、代々受け継がれてきた地域の生産技術が生かされてきました。

外観をみると、屋根は勾配がつけられ、軒は深く出ています。日本は雨の多い国であり、雨水が建物内に浸入すると建物を早く傷めるおそれがあることから、雨への対策はとても重要です。勾配屋根は降雨をいち早く建物の外に追いやる工夫ですし、深い軒は外壁に降雨を当たりにくくする機能をもちます。軒は夏期に強い日射を遮る効果もあります。また、柱、はりのフレームのあいだには大きな窓が取り付けられています。窓には室内に外部の風を取り入れ、太陽の明るい光を導き入れる効果があります。こうした地域の気候の影響を制御し、上手く利用しようとする環境親和型の技術は、現代の住まいにも用いることができ、電力をはじめとするエネルギー需要の抑制が課題となっている今日、一層再評価されるべきものと考えられます。

室内は、畳敷きの和室、戸外とのあいだの縁側、三和土の土間、木板を張った板の間があり、それぞれに機能がありました。和室は来客を迎え入れる座敷、家族の集う茶の間など、土間は日常の炊事のための場、農機具や漁具を手入れする作業場などとして使われていました。こうした住まいの複合された機能は、当時の社会や生産体制を背景に必要とされたものであり、現代そのまま必要とされるものではありません。しかし、住まいのなかで営まれた様々な生活シーンは、日常の暮らしに豊かさや奥深さを与えていた面もあると想像され、現代の住まいに多面性を付加することは有用な面もあると考えられます。



勾配屋根・瓦屋根（富山）



深い軒・縁側・すだれ・掃き出し窓（熊本）



和室・続き間・襖・障子（山形）

かつての日本には、このように地域で循環する住まい、長持ちする住まい、心地よく過ごせる住まい、多様な暮らしを許容できる住まいを実現するために、工夫が施された様々な要素が取り入れられていました。この「和の住まいのすすめ ～今に生きる日本の住まいの知恵～」は、それらの手法・技法や営まれていた住まい方を再確認し、現代における住まいづくりの参考になる考え方や技術的な内容を紹介します。

本編は、これから住宅の新築、購入や改修を行おうとする一般のユーザーの方の参考書として、工務店や住宅メーカー、素材生産者などの住まいづくりに携わる事業者がユーザーの方と情報を共有するツールとして、利用していただくことを想定しています。そのため、伝統に根ざした住まいづくりの手法・技法や住まい方の実例を交えて、住まいづくりの考え方や住まいを構成する要素をまとめています。実例は、様々な地域の住まい、伝統的な住まいと現代の住まい、現代の集合住宅などから、幅広く取り上げています。

これから住まいづくりを考える方に広く活用されることを願っています。

### 和の住まいのすすめ

発行 和の住まい推進関係省庁連絡会議  
平成25年10月  
印刷 加藤文明社

「今に生きる日本の住まいの知恵」編  
編集協力 アルセッド建築研究所

「日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会」（委員長：小林秀樹千葉大学大学院教授、事務局：公益財団法人日本住宅総合センター）における検討内容を基にとりまとめたものです。

# 和の 住まいの すすめ

— 今に生きる日本の住まいの知恵